

最後の晩餐の場面。周囲の空気が肌に感じられるか。権力者も権威者もことごとくイエス殺害を目論んでいる(ルカ 22:2)。また愛する直弟子の一人が(22:3)イエスを引き渡そうとしている(22:6)。そんな暗さの真ただ中でイエスは、過越の晩餐をおこなう(22:15)。

しかし、この期に及んでも使徒たちは偉さ較べにうつつをぬかし(22:24)、目覚めさせるようにイエスは、自分は給仕する者だと言う(22:27)。つまり最後の晩餐の作法は(22:17~20)、家父長的な分け与えではなく、給仕として仕える行為なのだ。

「イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えてそれを裂き、使徒たちに与えて言われた。〔これは、あなたがたのために与えられるわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい(22:19)〕」。

イエスに「このように行え」と命じられ、使徒たちを経て後代の教会に継承されて来た聖餐式。それにしても「わたしの記念」とは何のことであろうか。記念とは、単なる過去の思い出ではない。

パウロは、晩餐の言葉(1コリント 11:24~25)を語り伝え、「だから、あなたがたは、このパンを食べこの杯を飲むごとに、主が来られるときまで、主の死を告げ知らせるのだ(11:26)」と述べている。キリストが再臨されるまで、十字架の死をくり返し「心身」に刻みつけよ、ということなのか。

ところが再臨は、個々人の生涯を超えた未来に引き伸ばされている。つまり使徒や歴代のキリスト者たちは寿命尽き、神の御許でその日を待ち望んでいる。

使徒や先達はキリストのパンを食べ、杯を飲みつつボチボチ待っているのかもしれないが、イエスは妙に禁欲的で(ルカ 22:16~18)、周囲はやや気詰まりか。

預言者エレミヤは、再臨が起こる終りの日の契約を語っている(エレミヤ 31:33a)。「わたしの律法を彼らの胸の中に授け、彼らの心にそれを記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる(31:33b)」。

十字架はすでに成し遂げられている。すでに、この胸に授けられているキリストの恵み、この心に記されている罪の赦し。これらに対し、私たちが応えて契約(31:33a)は成立する。

救いの契約に応じ、新しい神の民となる覚悟をもって、私たちはキリストの体たるパンを食べ、永遠の命たる杯を飲む。

最後の晩餐の場面に戻ろう。「記念」としてのパンを分かち合った後、イエスは「この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による新しい契約である(ルカ 22:20)」と語り、杯を回し飲みした。この血による契約、言い換えればイエスの命の犠牲が使徒に渡され、新たな神の民が生まれる。

イエスは続けて語る。「しかし、見よ、わたしを裏切る者が、わたしと一緒に手を食卓に置いている(22:21)」。恐ろしげだが少しも非難がましいところがない。驚くべきは、裏切るユダが聖餐に加わり、救いのパンと杯に与っていること。

イエスにしてみれば、背く者にも命を分かち与える。人物を特定せずに裏切り行為を指摘したのは、裏切るユダを悔い改めに導きたかったのではないだろうか。

最後の晩餐では、イエスの錯綜した思いが垣間見られる。世の救いのために十字架で犠牲になることを決意され、使徒に己が体を裂いて渡し、己が命の血をもって新たな神の民を生まれさせた。その一方で、裏切るユダの暗闇にも光を投じている。

もしもユダが悔い改めたら、十字架は一時的に遠ざかるだろう。となると、他の使徒が暗闇へ踏み込むことになるのか。誰でもそうなりえる(22:23)。



《おまけのひとこと》

使徒の一人ユダ 他の使徒と分けたものは何か 十二人はほとんどスレスレ 五十歩百歩であった革命家イエスへの期待値が人一倍大きかったユダ 裏切った彼は 自分の頑なな熱意に裏切られた